全部床義歯患者の予後に関する臨床的研究

—装着5年後の調査—

細井 紀雄 森戸 光彦 椎名 順朗

吉川 建美 佐藤寿美子 三輪 悦子

松本 亀治 松本 良治 村田 憲信

棚木 徹也

A Clinical Study on the Prognosis of Complete Denture Wearers

— Survey of patients treated five years before —

Toshio Hosoi, Mitsuhiro Morito, Nobuaki Shiina,

Kemmi Yoshikawa, Sumiko Sato, Etsuko Miwa,

Kameji Matsumoto, Ryoji Matsumoto, Yoshinobu Murata,

Genya Tochigi

I. 緒 言

老年人口の急激な増加に伴い、最近老人医療問題が深刻に論議されており、歯科の分野においても医療のみならず、老人歯科学の重要性が叫ばれているのは周知の事柄である。

一般に口腔構造は身体諸臓器の中でも老化現象が最も著明に表れる部位であり、加齢に伴い、無歯顎患者が増加するのは避けられないようである。厚生省の歯科疾患実態調査によれば65歳では約30%が無歯顎となり、以後漸次増加し、80歳代になると約70%となる¹⁾といわれている。一方、高齢者にみられる全身的な老化と口腔諸組織の生理的、機能的な衰えは有床義歯、とりわけ全部床義歯への適応を難しくするため、補綴治療を一層困難なものにさせている。そこでわれわれは無歯顎患者の様々な問題点を解決する一助とするため、全部床義歯装着後の経過を観察することにより、その実態を把握する

こととした。経過観察の重要性についてはいうまでもないが、高齢者の場合、装着後の状態を長期間にわたり追跡調査するのは容易ではない。全部床義歯患者の個々の症例報告を除けば、多数例についてリコールを行い調査した報告はきわめて少なく²⁻⁵⁾、アンケートによる調査や診療録による統計調査を含めても数えるほどである⁶⁻⁹⁾。

われわれは今回予後調査を行うにあたり、時間の条件を一定にし、装着後5年を経過した全部床義歯患者を対象にアンケートとリコールによる調査を行い、患者の動態、口腔内の状態、義歯の状態などについて集計し、検討を加えたので報告する。

II. 資料および方法

1. 資 料

調査対象は鶴見大学歯学部臨床実習において製作し、装着した全部床義歯患者で装着後5年を経過した男性51名、女性63名の計114名である。内訳は昭和49年11月から昭和50年10月までに装着した59名と昭和51年4月から10月までに装着した55名であり、装着5年後の昭和55年10月と昭和56年9月にそれぞれ予後

鶴見大学歯学部歯科補綴学第3講座（主任：細井紀雄教授）
The Third Department of Prosthetic Dentistry, Tsurumi University School of Dental Medicine (Chief: Prof. Toshio Hosoi)

昭和58年4月28日受付

表 1 返信用アンケート

1. 定期診査に来院 (できる・できない)
2. 来院できない方は、その理由をお書き下さい。 ()
3. 当病院で入れた義歯を現在使用 (している・していない)
4. 使用している方のみお答え下さい。 咬めますか (咬める・咬めない) 上手に話せますか (話せる・話せない) 外観は (良い・普通・不満) 上の義歯は (落ちやすい・落ちにくい) 下の義歯は (すぐはずれる・落ちついている)
5. 使用していない方、その理由は 痛い・咬めない・話せない・ はずれやすい・外観が不満・ 壊れた・その他の理由
6. その後、別の義歯を使用 (している・していない)

表 2 臨床診査項目

1. 口腔粘膜の状態
2. 義歯の維持力
3. 人工歯の種類と摩耗
4. 義歯床および人工歯の破損
5. 前歯部の被蓋
6. 適合試験
7. 咬合接触状態
8. 咀嚼能率
9. 義歯の清掃状態

調査を行い、資料とした。

2. 方 法

往復ハガキによるアンケート調査とリコールによる問診および診査を行った。まず往復ハガキによるアンケート(表1)を調査対象114名に出し、5年前に装着した全部床義歯の使用状況ならびに来院して診査に応じられるか否かについて回答を求めた。

さらにリコールに応じて実際に来院した44名の患者について、アンケートの項目とほぼ同様の問診を行い、アンケートの結果と比較した。また義歯の使用状況、口腔内の状態、義歯の清掃状態などの臨床診査を行い(表2)、集計し検討を加えた。

表 3 返信状況 (1)

調査対象 114 名		
返 信	あ り	79名 (69.3%)
	な し	24名 (21.1%)
住 所	不 明	11名 (9.6%)

表 4 返信状況 (2)

返信79名	
来院の可否	例数
来院できる	60
来院できない	19
理由 (1)死 亡	6
(2)体調不良	5
(3)足が不自由	2
(4)記載なし	6

表 5 義歯の使用状況

返信79名	
使用 状 況	例数
使用している	54 (68.4%)
使用していない	25 (31.6%)
理由 (1)死 亡	6
(2)維持安定不良	5
(3)破 折	4
(4)気分が悪くなる	3
(5)痛 い	2
(6)記載なし	5

III. 結 果

1. アンケートの結果

1) 返信状況

調査対象114名に出したアンケートに対する返信状況は表3のとおりである。返信があったのは79名で返信率は69.3%であり、返信がなかったのは24名、住所不明でハガキが転送されてきたのは11名であった。

アンケートにより来院できるか否かを回答してもらった結果を表4に示した。

返信のあった79名中“来院できる”が60名、“来院できない”が19名であった。来院できない理由は、すでに死亡しているためが6名、体調不良なためが5名、足が不自由なためが2名、記載なしが6名であった。

2) 義歯の使用状況

表5は義歯の使用状況をまとめたものである。調査対

表 6 義歯使用者のアンケート結果

義歯使用者54名

アンケート項目	回 答	記載なし
咬めますか	咬める47・咬めない0	7
上手に話せますか	話せる45・話せない1	7
外 観	良い16・普通27・不満3	8
上の義歯は	落ちやすい9・落ちにくい34	11
下の義歯は	はずれやすい22・落ちついている24	8

表 7 来 院 数

年 齢 性別	40～49	50～59	60～69	70～79	80～89	90～	計
男	0 (0)	4 (6)	3 (9)	9 (22)	6 (12)	2 (2)	24 (51)
女	1 (2)	3 (9)	9 (22)	7 (21)	0 (8)	0 (1)	20 (63)
計	1 (2)	7 (15)	12 (31)	16 (43)	6 (20)	2 (3)	44 (114)

() 内は調査対象数

表 8 問診項目と集計結果

診査対象44名

問 診 項 目	はい (%)	いいえ (%)
咬めますか	44 (100)	0 (0)
話せますか	39 (88.6)	5 (11.4)
外観に満足していますか	38 (86.4)	6 (13.6)
適合状態は良いですか	上顎 39 (88.6) 下顎 23 (52.3)	5 (11.4) 21 (47.7)
床下に食片がはさまりますか	上顎 17 (38.6) 下顎 31 (70.5)	27 (61.4) 13 (29.5)
夜ははずしますか	23 (52.3)	21 (47.7)
清掃剤を使用していますか	18 (40.9)	26 (59.1)
義歯用ハブラシを使用していますか	26 (59.1)	18 (40.9)
清掃回数は1日何回ですか	0回1, 1回11, 2回12, 3回15, 4回3, 5回以上2	
修理したことがありますか	13 (29.5)	31 (70.5)
開口障害はありますか	1 (2.3)	43 (97.7)
関節痛はありますか	2 (4.5)	42 (95.5)
関節音はありますか	0 (0)	44 (100)

象114名のうち、住所不明と返信がなかったものを除き、使用していると返信のあったものは54名、使用していないもの25名であった。使用していない理由として、死亡、維持安定不良、義歯の破折、疼痛、気分が悪くなるなどがあげられ、気分が悪くなると答えたものはすべて上顎義歯が原因であり、他は下顎義歯が起因して

いた。

3) 質問項目の結果

使用している人のみに回答してもらった質問の結果を表6に示す。

“咬めますか”については、記載なしの7名を除き咬めるとの回答であった。“上手に話せますか”は話せる

表 9 食品別咀嚼能に関する問診結果

診査対象44名

グループ	食 品	咬 め る	咬 め ない	た べ ない
6	古たくあん	24	16	4
	ビーナッツ	30	11	3
	堅焼せんべい	33	10	1
	雑 煮 餅	39	5	0
		71.6%	23.9%	4.5%
5	ピ フ テ キ	31	11	2
	酢 だ こ	23	13	8
	するめいか	13	24	7
	お こ し	32	7	5
	フランスパン	31	9	4
		58.5%	28.8%	11.7%
4	お こ わ	44	0	0
	いかの刺身	31	8	5
	ハ ム	40	3	1
	カ マ ボ コ	41	3	0
	コンニャク	42	2	0
	ち く わ	41	2	1
		90.5%	6.8%	2.7%
3	ご は ん	44	0	0
	まぐろの刺身	43	1	0
	蒲 焼 き	40	0	4
	は ん べ ん	43	0	1
	煮 魚	43	0	1
		96.8%	0.5%	2.7%
2	お か ゆ	44	0	0
	と う ふ	44	0	0
		100.0%		

が45名、話せないが1名、記載なしが7名であり、“外観は”については良いが16名、普通が27名、不満が3名、記載なしが8名であった。また、上顎義歯がおちやすい人は9名、おちにくい人は34名、記載なしが11名であり、下顎義歯がはずれやすい人は22名で、おちついている人は24名、記載なしは8名であった。

2. リコールによる問診の結果

1) 来院数と来院率

来院できると回答した54名のうち、実際にリコールに応じて来院し、診査を受けたものは44名で、来院率

表 10 口腔粘膜の状態

診査対象44名

	発赤	疼痛	潰瘍	口角ビラン	Denture fibroma	Flabby gum
あり	3	5	4	3	1	15
なし	41	39	40	41	43	29

は調査対象の38.6%にあたる。性別では男性24名、女性20名、年代別では70代が最も多く16名、つぎが60代で12名であり、最高齢者は92歳男性であった(表7)。

2) 問診の結果

来院して診査に応じた患者についてアンケートの質問項目の他に床下に食片がはさまりますかなど9項目を加えて問診した。その結果を表8に示した。

アンケートの項目と重複した問診についてはアンケートとほぼ同様の結果が得られた。就寝時義歯をはずす人とはずさない人はほぼ半数ずつであり、清掃回数は1日3回(食事毎)が最も多かった。顎関節に異常を訴えるものが僅かに認められたが、義歯装着との因果関係は不明であった。

3) 食品別咀嚼能に関する問診結果

“咬めますか”という問いに対して来院した44名全員が咬めると答えているが具体的にどのような食品が咬めるのかを山本による咬度表¹⁰⁾を参考に食品を選び問診した。咬める、咬めない、食べないのいずれかについて回答してもらい山本の咬度表に従ってグループ別に分類し、集計した結果が表9である。なおグループ1はスープなので問診から除外した。注目すべきことは最も咬みにくい食品とされているグループ6で約70%のものが咬めると答えているのに対し、グループ5では約60%で、グループ5の食品群の方が咬みにくいという結果が出たことである。同様に咬めない、食べないと回答したのもグループ5が最も多く、ついでグループ6、4、3の順であった。

3. 臨床診査の結果

リコールにより来院した患者について表2に示す各項目について診査を行った。このうち今回は、1, 2, 3, 4, 9の項目について報告する。なお、術者間の差を可及的に少なくするため、診査内容について十分な打ち合わせを行った。

1) 口腔粘膜の状態(表10)

視診と触診により口腔粘膜の状態を診査した結果、何らかの病変が認められたものは24名であった。内訳は

表 11 義歯の維持力

診査対象44名

	上顎	下顎
良	41	18
不良	3	26

表 12 人工歯の種類と摩耗

診査対象44名

種 類	例数	摩 耗		
		高 度	中 等 度	軽 度
陶 歯	40	0	23	17
レジン歯	4	2	2	0

発赤 3, 疼痛 5, 潰瘍 4, 口角ビラン 3, Denture fibroma 1, flabby gum 15 であった。flabby gum については義歯装着時の記載がないため、装着後に生じたものか否かは不明である。また一口腔で複数の病変が認められたものもあった。

2) 義歯の維持力 (表 11)

維持力の判定は患者に中心咬合位で咬合させた後、術者が手指により着脱方向に引っぱることと、患者自身に最大開口と口唇突出をさせることにより判定した。離脱しにくい場合を良、簡単に離脱する場合を不良とした。その結果、上顎は 41 名と大部分が維持良好と判定されたが、下顎は 26 名が不良と判定された。

3) 人工歯の摩耗 (表 12)

本学臨床実習では、耐摩耗性を考慮して臼歯人工歯は陶歯の使用を原則としており、44 名中 40 名が陶歯を使用し、レジン歯は 4 名であり、金属歯の使用は皆無であった。

摩耗については、肉眼的観察により行ったが陶歯では中等度の摩耗が 23 名に、軽度の摩耗が 17 名に認められ、レジン歯では中等度と高度の摩耗が各々 2 名にみられた。

4) 義歯床および人工歯の破損 (表 13)

床の破損は 4 名にみられ、破折 1, 亀裂 3 であった。人工歯の破損が観察されたのは 28 名であり、すべて陶歯であり破損歯数は合計 89 歯であった。これらは咬頭の一部がチップしたものであり、歯種別では第 1 大臼歯に最も多く発現しており、上下顎で 36 歯に及んでいた。上下顎別では下顎よりも上顎に多く認められた。

5) 義歯の清掃状態 (表 14)

義歯の清掃状態を中性紅を用いて“最良”“良”“不良”

表 13 義歯床および人工歯の破損と部位

診査対象44名

	あ り	な し
床 破 損	4	40
人工歯破損	28	16

床破損部位

部 位	上顎	下顎	計
正 中 部	0	3	3
小 臼 歯 部	0	1	1
計	0	4	4

人工歯破損部位

部 位	上顎	下顎	計
中 切 歯	1	0	1
犬 歯	1	0	1
第 1 小臼歯	11	0	11
第 2 小臼歯	14	4	18
第 1 大臼歯	19	17	36
第 2 大臼歯	10	12	22
計	56	33	89

表 14 義歯の清掃状態

診査対象44名

最 良	10
良	27
不 良	7

の 3 段階に分類し、判定した。判定は義歯を 0.1% 中性紅に 1 分間浸漬した後流水下で軽く洗い、人工歯歯頸部付近にのみ染色が認められるものを最良、床筋圧面、床基底面全体に染色されたものを不良、その中間を良とした。その結果、最良 10 名、良 27 名、不良 7 名であった。

IV. 考 察

1. 資料および調査対象について

多数例の全部床義歯患者についてリコールし、予後調査を行った報告は平沼ら²⁾、著者ら³⁾の報告がある。平沼らは装着期間 9 カ月から 9 年にわたる 390 名の患者を対象にアンケート調査を行い、さらにリコールに応じた 56 名について診査を行っている。それによれば来院した患者は装着期間が 3 年から 5 年のものが最も多いとしている。また装着後 4 年を経過すると義歯の吸着状態が悪く

表 15 アンケートに対する返信状況と来院状況

	調査対象	返信数	返信率	来院数	来院率	使用	使用率
平沼, 他 ²⁾	390名	167名	42.8%	56名	33.5%	135名	34.6%
細井, 他 ⁴⁾	114名	79名	69.8%	44名	38.6%	54名	47.4%
小山, 横山 ⁷⁾	52名	35名	64.8%				
Bergman, B. ⁵⁾	60名	54名	90.0%				
中沢, 他 ¹²⁾	2,097名	1,462名	54.3%	948名	45.2%		

なる比率が高まると報告している。林ら¹¹⁾は部分床義歯や全部床義歯の統計調査から義歯の耐用期間を3年くらいと考えるのが妥当であろうと述べている。このような先人の報告や臨床経験から、著者らは全部床義歯装着後5年が義歯を評価する上で、重要な意味を持つのではないかと考え、装着期間が5年という一定の時間に限局し、予後調査を行うこととした。したがって資料はすべて、本学の歯学部臨床実習で製作し、装着されたもので装着期間が5年という条件を満たしたものである。

2. 返信数および来院数について

調査対象114名に対する返信率は約70%で全部床義歯の予後調査を行った平沼ら²⁾の約43%、小山ら⁷⁾の約65%、部分床義歯の予後調査を行った中沢ら¹²⁾の約54%を上回った。中沢、平沼らは調査対象が多いので単純に比較できないが、義歯に対する関心の高さを示したものと考えられる(表15)。

来院率は約39%で他の調査と大きな差はなかった。アンケート調査では60名が来院すると答えたが指定した期間に実際に来院したのは44名で、来院日、来院時間に自由度を持たせれば来院率を高めることは可能と推測された。しかし、著者らが装着後1年を経過した時点で行った調査対象を同一とする予後調査では返信率61%、来院率44%であった³⁾ことを考えると時間の経過の割には低い数字とはいえない。なお診査を受けたくても体調が悪かったり、足が不自由であったりして来院できないものが7名あったことは、高齢者の特徴的現象と解釈できるかもしれない。

3. 義歯の使用状況について

調査対象114名中、使用が明らかなのは54名で47.4%であった。平沼らは使用率をアンケートの回答者の百分率で表しているが、これを調査対象全体でみると34.6%となる。平沼らの調査は装着後9カ月より9年とかなり長期にわたるものも対象としているため、やや低い率になったように思われる。また、維持安定不良、破折、

気分が悪くなる、疼痛などを理由に使用を中止したのは全体の16.7%である。すでに死亡したもの6名を加えると21.9%になるので、残りの30%弱は使用の有無が不明であるが、5年後の全部床義歯の使用状況がおおよそ見当がつくのではないだろうか。いずれにしても装着後5年を経過して約半数が使用しているという事実を考慮すると、有床義歯の耐用年数は3年よりもう少し長く考えてもよいのではなかろうか。

4. 性別および年齢別について

調査対象114名中女性はや55%を占めているが、来院して診査を受けた数は男性の方が55%と逆に多くなっている。また年齢別の分布では調査対象数は70歳代が最も多く、60歳代、80歳代、50歳代の順であるが、来院率は50歳代が最も高く、60歳代、70歳代、80歳代と漸次低下しており、高齢になるに従い来院が難しくなることを示唆している。

5. 問診の結果について

“咬めますか”“外観は”についてアンケートと同様問診を行ったところ、“咬めますか”は44名、100%がはいと答え、“話せますか”は88.6%、外観に満足しているものは86.4%であった。話がしづらいもの5名、外観について不満をもつものが6名あったが、会話や外観について多少不満はあっても、咬めるということが義歯を使用できる最低の条件と考えて良いのではなかろうか。

義歯の適合状態に関する問診では下顎義歯の適合状態が不良と答えた人は48%で、上顎義歯の5倍に達したが、床下に食片がはさまると答えた人が下顎義歯で70%あったこととあわせて、下顎全部床義歯の難しさを改めて考えさせられた。

“夜は義歯をはずしますか”については、ほぼ半数が義歯を装着したまま就寝すると答えている。われわれは義歯をはずしてやすむことを勧めているが、外観、緊急時の避難、顎口腔系への影響などの観点から、無歯顎患

表 16 就寝時義歯装着と口腔粘膜の状態

診査対象44名			
口腔粘膜の病変	あ り	な し	計
装 着	14	7	21
非 装 着	10	13	23
計	24	20	44

者については特に就寝時の義歯の取り扱い法を検討する余地がある。

義歯の清掃回数については1日3回磨く人が最も多く、全く磨かない人は1名であった。義歯の取り扱い方に関する指導の影響か、口腔内の清潔保持への関心の高さがうかがえた。

食品別咀嚼能に関する問診では、全部床義歯の咬度表として使用されている山本式判定法を利用したが、最も咬みにくい食品として分類されているグループ6よりもグループ5の方が咬めない食品が多いという結果となった。すなわち、ピーナッツ、堅焼きせんべいなどの破砕性の食品よりも、するめいか、酢だこ、古たくあんのような破砕や切断がしにくい、しかも顎堤にとって抵抗の大きい食品が全部床義歯患者には最も咬みにくい食品といえるようである。松浦ら¹⁹⁾の研究においてもいかの刺身、酢だこは最も咬みにくい咬度Vに分類されており、難易度から考えると山本の判定表のグループ5、グループ6の分類は一考の余地があると思われる。また雑煮餅はたべない人が0の数字にも表れているように老人に好まれる食品と考えられ、食品に対する嗜好性が咬めるか咬めないかに心理的影響を与えていることも考えられる。今後さらに例数を増して検討を加えたい。

6. 臨床診査について

1) 口腔粘膜の状態

視診、触診により何らかの所見ありと認められたのは24名54.5%と高率であったが、これは flabby gum が15名存在したため高率になったものと思われる。Denture fibroma を有している1名を加え、これら16名は義歯装着時の記録が不明なため断定はできないが、義歯装着以前にすでに存在していたのではないかと考えられる。Bergman ら⁵⁾は全部床義歯装着後2年の調査で、口腔粘膜の炎症は91例中60例(65.9%)に認められたと報告している。また下顎よりも上顎に多いことを述べている。これらは顎粘膜を被う義歯床面積のちがいによる影響、あるいは下顎義歯により上顎義歯が突き上げられることによって生ずる外傷性変化の影響などが指

表 17 清掃状態と清掃回数との関係

診査対象44名								
回数 清掃状態	0	1	2	3	4	5	6以上	計
最 良		2	4	3	1			10
良	2	8	7	9			1	27
不 良		1	1	2	2	1		7
計	2	11	12	14	3	1	1	44

摘されている。

口腔粘膜に何らかの所見が認められたものについて、夜間就寝時における義歯装着との関係を検討した結果、夜間装着者の66.7%に何らかの所見が認められ、非装着者の43.5%を上回った。この結果から考えると就寝時は義歯をはずした方が顎粘膜の健康保持のためには良いということになる(表16)。

2) 義歯の維持力

義歯の維持力の診査では、下顎義歯に不良例が多く認められた。これは問診の結果よりも高率であり、術者の判定では維持が不良と思われる場合でも、患者自身は不良と感じていない場合もあるようである。平沼らの調査では義歯の吸着状態は上顎では不良例は少なく、下顎では34%に不良が認められたと報告している。著者らの方が高率であるが義歯の使用を中止するほどではない。前記の咀嚼能の問診ではいずれも咬めると答えており、義歯の更新の時期に来ているかどうかこの結果だけでは判定できない。維持力、あるいは吸着状態の良否を判定する客観的かつ定量的な方法が確立されれば、相互の比較も容易になろう。

3) 人工歯および義歯床の破損について

人工歯の破損では咬頭の一部が欠損するチップが多く観察された。これらはすべて陶歯に認められたが、耐摩耗性に優れているのみならず衝撃に抵抗し、縁端強度の強い材料が望まれる。また、咬合調整時に十分削合を行い、さらに鋭利な薄い部分を残さないように調整することが必要であろう。部位別にみて第1大臼歯が最も多いのは、咀嚼中心になっているためと推察される。

4) 義歯の清掃状態について

義歯の清掃状態はおおむね良好であり、不良は僅か7例、全体の16%であった。これは義歯の取り扱い方に関するパンフレットを渡し、患者指導を行っている成果とも考えられる。しかし、1日に3回、4回と清掃する患者にも不良例が認められたことは義歯清掃法についてさらに効果的な術式を指導する必要がある(表17)。この

表 18 清掃状態と清掃剤・義歯用ハブラシ使用との関係
診査対象44名

清掃状態	例数	清 掃 剤		義歯用ハブラシ	
		使用	不使用	使用	不使用
最 良	10	9	1	9	1
良	27	8	19	13	14
不 良	7	1	6	4	3

表 19 清掃状態と就寝時義歯装着との関係
診査対象44名

清掃状態	装着	非装着	計
最 良	1	9	10
良	13	14	27
不 良	7	0	7
計	21	23	44

ように清掃回数と清掃状態の良否の関連性については一定の傾向が認められなかったが、最良と判定された義歯装着者のほとんどは清掃剤と義歯用ハブラシを併用していたので、清掃状態の良否は清掃回数よりも方法に問題があると考えられる(表18)。就寝時、義歯を装着しているか否かによって比較すると、義歯をはずしてやすむものに最良、良が多く、清掃不良例は皆無であり、装着して就寝すると答えたものに不良が7例認められた(表19)。清掃状態の判定法についても今後は肉眼的観察だけでなく、客観的評価法を検討すべきであると思われる。

V. 結 論

昭和49年から昭和51年にかけて装着した全部床義歯患者について、装着後5年の経過をアンケートとリコールにより調査した。調査対象は鶴見大学歯学部臨床実習で製作し、装着された全部床義歯患者114名で、男性51名、女性63名である。

1. アンケートによる調査

1) アンケートの返信数は79名で69.3%の返信率であった。そのうちリコールに応じられると答えたものは60名であった。

2) 装着時の義歯を使用していることが明らかなものは54名で調査対象の47.4%であった。使用していないものは25名であった。

3) “咬めますか” “上手に話せますか” “外観は”につ

いては満足を示すものが多かった。また、上顎義歯が落ちやすいと答えたものは7名、下顎義歯がはずれやすいと答えたものは20名であった。

2. リコールによる調査

1) リコールに応じ来院したものは44名で来院率は調査対象数の38.6%であった。

2) 年齢別では70歳代16名と最も多く、60歳代、80歳代、50歳代の順であった。

3) “咬めますか” “話せますか” “外観は”についてはアンケート調査とほぼ一致した回答が得られた。

4) 義歯清掃のために清掃剤、義歯用ハブラシを約半数が使用し、清掃回数は1日1～3回磨くものが大部分であった。

5) 食品別咀嚼能に関する問診では“咬めない” “たべない” と答えた食品のうち最も多かったのはすめいか、ついで酢だこ、古たくあんの順であった。

6) 口腔粘膜に何らかの所見ありと認められたものは24名、54.5%であった。

7) 義歯の維持力については、上顎義歯は93.2%が良好と判定されたが下顎義歯は40.9%であった。

8) 人工歯の摩耗についてはレジン歯を使用した症例は4例であったが、いずれも高度な摩耗が認められた。

9) 人工歯の一部破損を含めると44名中32名に義歯床に変化が認められた。

10) 中性紅による義歯の染め出し試験の結果、清掃状態が最良のもの10名、良27名、不良7名であった。

文 献

- 1) 能美光房：老年者医療の問題点，歯科ジャーナル，10：417～426，1979。
- 2) 平沼謙二，太田 功，市原 浩，岡本和政，中島俊明，波多野光彦，高間龍彦，大久保忠博：全部床義歯の術後観察（その1），補綴誌，23：654～659，1979。
- 3) 松永郁子，斎川紀代子，椎名順朗，森戸光彦，細井紀雄，尾花甚一：全部床義歯患者の統計調査と経過観察，鶴見歯学，3：129～138，1977。
- 4) 細井紀雄，森戸光彦，尾花甚一：全部床義歯装着後の変化—歯学部臨床実習の症例を中心に—，日歯評論，413：43～54，1977。
- 5) Bergman, B., Carlsson, G.E. and Hedegard, B.: A longitudinal two-year study of a number of full denture cases, Acta. odont. scand., 22: 3～26, 1964.
- 6) Bergman, B., Carlsson, G.E.: Review of 54 com-

plete denture wearers—Patients' opinions 1 year after treatment, *Acta. odont. scand.*, 30 : 399~414, 1972.

- 7) 小山正宏, 横山健介 : 総義歯患者 35 名の調査—治療 1 年後の患者意見—, 補綴誌, 18 : 32~34, 1974.
- 8) 松本直之, 他 : 全部床義歯患者の臨床的観察, 第 1 報 一般的診査事項, 口病誌, 27 : 329~334, 1960.
- 9) 小正 裕, 西浦 恂, 他 : 総義歯患者の統計的観察, 第 1 報 一般的診査事項について, 歯科医学, 43 : 561~566, 1980.
- 10) 山本為之 : 総義歯臼歯部人工歯の配列について (その 2), 補綴臨床, 5 : 395~400, 1972.
- 11) 林都志夫, 山田 巖 : 義歯更新の時期について, 歯界展望, 24 : 491~497, 1964.
- 12) 中沢 勇, 他 : 部分床義歯の予後に関する臨床的研究 (Ⅲ), 補綴誌, 19 : 238~246, 1975.
- 13) 松浦正朗, 野村隆祥, 田中樹彦, 中村広一, 瀬戸皖一 : 義顎装用者の簡単な咀嚼能の測定法について, 顎顔面補綴, 4 : 52~58, 1981.

Summary

The purpose of this study were estimated the clinical effects of complete dentures which were fitted five years

ago. The subjects were 114 edentulous patients who were treated at the Tsurumi University Hospital from 1974 to 1976.

The questionnaire regarding complete denture was sent out to the patients, and who were recalled to inspect their clinical conditions of oral tissues and dentures, closely.

We received answers of the questionnaire from 79 persons. 60 persons of them answered that they could visit for personal interview and clinical examination. 54 persons had used the dentures continuously for five years but 25 persons did not use the dentures. 41 persons expressed satisfaction with mastication, 40 persons with the speaking ability and 38 persons with the appearance. 44 persons actually visited the Tsurumi University Hospital at recall. 44 subjects consisted of 24 males and 20 females. The range of the age distribution was from 40's to 90's years old.

The results of clinical examination were as follows.

- 1) Oral mucous membrane symptoms were found in 24 persons.
- 2) 41 upper complete dentures were judged good retention.
- 3) Denture plaque was seen in 34 subjects.